
MOON-3 『WOLF MEET VAMPIRE』 <1>

みづき海斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MOON - 3 『WOLF MEET VAMPIRE』 > 1 <

【Nコード】

N9628L

【作者名】

みづき海斗

【あらすじ】

魔力とも思える夜桜の下に彼はいた。

『この時間』に『その場所』でなどという疑問も抱かせずに。

2人は出逢う運命だったのだろうか……。

WOLF MEET VAMPIRE (前書き)

ノリです(「¥」。。。お付き合いのほどよろしく願います。

WOLF MEET VAMPIRE

< 1 >

桜は、夜に満開となる。

．．．
昼の人々に打ちひしがれ、人々の束縛から解放されたかのように．

．．．
この街では夜になると、桜が両腕^{かいな}を広げて咲き誇る。
一体、いつの頃からであつたろうか。

撮影は、夜10：00には過ぎに順調に終わった。

突然舞い込んだ、秋物のCM撮影だったが、たまたまスタッフ全員が国内にいたことと、秀が某アイドルのコンサート用のスチール撮りを終えたばかりで、比較的まとまった時間をとれたことが幸いしていた。

青山にあるオフィスでフィルムの編集を終えた秀が、東中野にある自宅のマンションへ向かう頃には、時計の針は深夜3：00を廻っていた。

暖かい春風がそよぐ季節だった。

Tシャツに皮ジャンで身を包み、新宿経由のいつものコースを単車で疾走する。

いつもであればそのままマンションの自室に飛び込み、シャワーも浴びずにベッドへ潜り込む秀であるが、ふと、すぐ近くの公園通りでバイクを降りて歩いて帰ろうなどと思ったのは、中空の満月に気づいたからか．．．

それとも、路上の脇に咲き誇る夜桜の気まぐれが彼を招いたのか．．．

朝靄の中で咲き誇るその光景は、魔力とも思える威力で秀を魅了していた。

「こんなに、凄かったけ、ここの桜。」

寝ぼけ眼で、日中ベランダから望む俯いたその姿とは、確かに違う。

彼らは、『夜』を満喫していた――

黒いバイクの左手に立ち、ゆつくりと路上を歩く。

足下では、桜の花びらが優しい夜風と戯れている。

マンションの白い一角が樹木の彼方に望まれる頃・・・秀は、歩みを止めた。

バイクを押していた手をハンドルから離す。

桜を狂わした『魔力』は、こいつが放ったのか――彼は無意識にそう思った。

そして――もう長いこと『満月』を意識せず、『普通』の生活を送ってきた自分にそれを”自覚”させてしまったのも・・・。

一人の青年が、桜の樹木の下にいた。

『この時間』に『この場所』でなどと思わせぬほどの自然さで。

遠目に見えるその姿は、鮮やかな桜色にも輝きを失わぬ碧がかった黒髪と、秀と同じくらいの身長――身を包む黒いコートは、一層、体の線を細くさせている。

男性か女性か――俯き加減の表情が秀の中の性別と『夢』と『現実』との境を皆無にしていた。

ただ、彼の右手がポケットから探り当てたカメラを引きずり出し、シャッターを前方に向けて切った時、

カシャ・・・

全ての答えが出た。

「何をしている。」

冷やかな声と、視線が秀を捕える。

「あ、いや・・・あまりにも『絵』になってたんで、つい、こう、手が・・・」

小型カメラの向こうで、秀が答える。

あまりにも整い過ぎたその容貌と、不思議と自分の心を捕えてならない、碧色をしたその瞳に視線を釘付けにされたまま。

青年は彼に近づき、オブジェ状態の秀の手中からカメラを奪い取った。

力チャ

彼の手によって開けられた裏蓋の下で、黒いフィルムは昇り始めた陽光にさらされた。

その結論は、誰にでも想像できる。

「あーっ！お前つてば、お前つてば！」

秀は、悲鳴を上げながら青年の手中からカメラを奪い返した。

悲痛な眼差しで、フィルムの状態を確認し、

「まったく！何て事してくれたの？……あー！せつかくのフィルムが台無しだろ！」

恨めしげな視線を、彼は微動だにせず受け止め、

「自業自得だろ？勝手に人の写真なんか撮りやがって。」

不快感を露わにした口調で答えた。

「だからつてな、こんなムボーな仕返してないんじゃないの？」

既に秀へ背を向け、桜並木の下を歩き始めた青年の後を慌てて追いかけるながら抗議する。

「もしも、他の写真が入ってたりしたら、どうしてくれるの！」

「……。」

彼は、自分と並んだ秀を横目でちらつと眺め、一呼吸の後、悪戯っぽい笑みを浮かべて言った。「『入ってないだろ。その中には。』」

「

「え……。」

秀は立ち止った。「どという意味。」

「文字通りさ。」

数メートル先で、肩越しにその青年は振り返って微笑む。「B Y E。」

そっけない別れの挨拶を秀に残し、彼は一人で歩き始める。

ここで逃したら――二度と会えない気がした。

『逃がしてはならない』――そんな不安に駆られ、秀は彼の後を追っていた。

何故だろう……自分でもわからない。

自分でもわからない、何かが彼にはあった。

だから……追った。

2人が出逢ったのは、桜の木の下――

2人以外、『何もない』はずだった。

WOLF MEET VAMPIRE (後書き)

引き続き、他作品同様ご愛顧くださいませ(「¥)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9628/>

MOON-3 『WOLF MEET VAMPIRE』 <1>

2010年10月20日20時04分発行